琉球大学学術リポジトリ

個々の特性を活かした授業づくりの一考察：個の支援から全体への指導・支援という視点に着目して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2018-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮城, 麻里 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41610

個々の特性を活かした授業づくりの一考察

ー個の支援から全体への指導・支援という視点に着目してー

宮城 麻里

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻

1．問題関心

平成24年7月，中央教育審議会初等中等教育分科会は「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」を報告した。この中で「障害のある子どもと障害のない子どもが，できるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すべきである。その場合には，それぞれの子どもが，授業内容が分かり学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら，充実した時間を過ごしつつ，生きる力を身に付けていけるかどうか，これが最も本質的な視点であり，そのための環境整備が必要である」（中教審答申，2012）と述べている。

一方，学校基本調査（文部科学省，2017）において，平成29年度の特別支援学級在籍者数（235,487人）は，特別支援教育がスタートした平成19年（113,377人）から約2倍に増加しており，特別支援学級数も増加傾向にある。これは，特殊教育から特別支援教育への転換により，発達障害を含めた特別な支援を必要とする子どもが対象に加わったことが大きな要因として考えられる。しかし，急激に需要が高まった特別支援学級において，本当の専門性は保障されているのだろうか。わが国の通常教育について，田上・猪狩（2017）は，「インクルーシブ教育と逆行するかのように，特別支援学校・学級の過大過密化が進行している」とし，こうした現象について，「通常の学校からの避難」「特別な教育的ニーズをもつ子どもの居場所がない通常の学校」の現状が指摘されていることを報告している。さらに，河合(2016)も「通常学校における『スタンダード』や『合理的配慮』の名の下に，特定の指導技法が規準化され，それによって特別な支援の必要な子ども・青年たちをさらに統制・排除する現実がある」とし，「通常学校と特別支援学校の双方が自律して『子どもに合った学校』を創出することが志向されなければならない」と述べている。これは，通常学級に発達障害の特性が強い子どもが高い割合で在籍するとされているにも関わらず，適切な支援が十分になされていないと捉えられる。通常学級が，多様な子どもの居場所となるよう，支援が必要な子どもへの配慮を見直し，改善していく必要がある。

小学校学習指導要領解説　総則編（文部科学省，2017）では，全ての教職員が，「通常の学級にも，障害のある児童のみならず，教育上特別の支援を必要とする児童が在籍している可能性があることを前提に」「各教科等においても，（中略）学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的，組織的に行うこと」としており，各教科等で指導の工夫が求められている。インクルーシブ教育システムの構築を目指し，通常学級において，発達障害の特性等を含めた特別な教育的ニーズに対応するためには，学校生活の大部分を占める授業の充実を図り，個々の特性に着目し，個に対する配慮を踏まえた学級全体への対応力を高めていく必要があると考える。そうすることで，通常学級が特別な教育的ニーズをもつ子どもの居場所となり，特別支援学級在籍者数の増加を抑えることにもつながるのではないだろうか。

以上のことから，本研究では，通常学級における授業の現状の課題を踏まえ，授業づくりを「個の支援から全体への指導・支援」という視点で，個々の特性に着目した手立てを全体の手立てとして活かしていく具体例を示していく。

２．目的（明らかにしたいこと）

本研究の目的は，支援が必要な子どもの特性理解のためのアセスメントを行い，その特性を踏まえた教材・教具，学習環境及び学習方法を学級全体での授業づくりに活かしていくことである。

３．研究内容

（１）支援が必要な子どもの特性・学級全体の様子についての理解

①個々の特性理解

特性理解のためのアセスメントは，ア．チェックシート，イ．行動観察の記録，ウ．各検査結果等，エ．個別の指導計画，の４方法で行う。チェックシートは，対応の仕方を考える手順が本研究と一致していること，様々な特性の子どもに対応できること，使用方法が簡単であること等から，井上・杉本（2008）が作成した97項目のチェックリストを使用する。

②学級状況の把握

個々の実態を踏まえ，学級担任と情報共有を密にしながら，学級全体の環境整備や人間関係等の関連図を作成する。これをもとに学習場面でのつまずきを想定し，授業実践に活かしていく。

（２）特別支援教育の視点を活かした授業づくり（学習方法，学習環境等）

インクルーシブ教育システムの構築を目指す動向を背景に，通常学級における教育実践としてユニバーサルデザイン（以下，UDとする）が提案されている。UD教育は，「視覚や触覚に訴える環境設定が準備され，児童同士の関係が支持的で間違いが許容される学級風土のなか，全ての児童が学びに参加できる，多様な学び方への柔軟な対応や必要な学習活動に十分に取り組める授業デザインをめざす教育」（大須賀，2016）である。一方，片岡（2015）は，「UD教育＝特別支援教育」とみられている傾向があると指摘しており，本来，特別支援教育で求められる，個のニーズに応じた追加的な支援が，普遍化されたUD教育を行うことで見過ごされる可能性（田上ら，2017）が危惧されていることに留意する必要があるだろう。さらに，伊藤（2016）は，「教育におけるUD」を特別支援教育の専門性をベースに捉え，「特別な教育的支援を要する子どもには，『ないと困る』支援であり，可能な限りすべての子どもにとって『あると便利』な支援を目指すこと」と定義し，UD教育の課題を踏まえつつ，広く実践がなされることが求められるとしている。UD教育研究による実践を指導技術・技法等として参考にしながら，個から捉え始める視点を授業づくりに積極的に取り入れることにも意義があると考える。また，授業づくりの土台として学級経営があり，指導や支援のあり方に大きく影響することを視野に入れながら授業づくりを進めていく必要がある。評価については，図１（小貫ら，2010）の視点を参考に，チェックシートを使用する。

図１　特別支援教育における「包み込むモデル」

４．研究方法

（１）ビデオ分析

上述した授業づくりの視点でビデオ分析を行い，個別・学級全体の様子やその変容等を評価・検討する。

（２）参観シート・ノート・ワークシート・アンケート等の分析

上述した授業づくりの視点で学級担任や参観者に参観シートを記入してもらい，本時や単元の目標の達成具合，児童の活動への取り組みの姿勢等の評価・検討する。また，児童のノートやワークシート，授業後のアンケート等から，授業の分かりやすさや教材・教具の使いやすさ等の評価も行う。

５．研究実践

（１）課題発見実習Ⅰ・Ⅱ（琉球大学教育学部附属中学校・宜野湾市立普天間第二小学校）における実践

授業実践の前には，学級担任・教科担任と情報交換と自身の授業観察から，児童生徒の実態把握を行った（表１：琉球大学教育学部附属中学校，表２：宜野湾市立普天間第二小学校）。その後，児童生徒の学習場面でのつまずきやその背景を探り，授業づくりの工夫・手立てを考え，実践につなげた。表１の下線を付した手立ては，１時間目の教科担任との振り返り後に追加した。また，評価は，自己の授業実践の振り返りと担任及び教科担任との情報交換から行った。琉球大学附属教育学部中学校では，授業後に生徒対象にアンケートも実施した。授業実践については，琉球大学附属教育学部中学校第３学年の３学級において，それぞれ１時間の国語（短歌）の授業，宜野湾市立普天間第二小学校第１学年１学級において，算数「繰り上がりのあるたし算」の単元の授業を行った。

表１　実態に応じた授業実践の工夫・評価（琉球大学教育学部附属中学校）

学級の実態	つまずき	工夫・手立て	評価
○口頭での指示や説明に加えて視覚的な情報があると把握しやすい生徒がいる。	☆重要語句を思い出すことに時間がかかる。	・重要語句の単語カードを黒板に提示する。【教具】	●単語をつなぎ，既習内容を説明しやすかった。（アンケート記述）
	☆説明する文章を構成できない。		
○指示等を聞き落としたり，忘れたりしがちな生徒がいる。	☆指示を理解できずすぐに移動できない。	・グループの机の配置を図で示す。【指示】	●全体的にスムーズに移動ができた。
	☆説明内容が把握できず，次の活動に移れない。	・説明後の質問の有無の確認をする。【説明】	●説明内容が確認でき個人的な質問が減少した。
○活動にとりかかるまでに時間がかかる生徒がいる。	☆授業全体の見通しが持てず不安になる。諦める。	・具体的な時間を黒板に提示する。【指示】	●生徒同士で黒板を見て次の活動を確認できた。
	☆活動の見通しが持てず，リズムがつかめない。	・タイマーで時間を設定する。【教具】	●残り時間について声をかけ合っていた。
○言葉で事象を想像しづらい生徒がいる。	☆テーマに関連する言葉が想起できない。	・ヒントとなる写真を提示する。【教具】	●思考の手がかりとなっていた。
○複数の情報を認識・処理することが苦手な生徒がいる。	☆自分の担当が何か分からない。	・色分けしたカードを使う。【教具】	●授業者への質問が減少し，生徒同士で解決していた。
	☆何に着目すると良いかが分からない。	・活動や思考の視点を提示する。【指示】	
○書く活動に時間がかかる生徒がいる。	☆どこに何を書くかがわからない。	・ワークシートの書き込む箇所に枠をつくる。【教具】	●書く場所が分かりやすかった。（アンケート記述）

表２　実態に応じた授業実践の工夫・評価（宜野湾市立普天間第二小学校）

学級の実態	つまずき	工夫・手立て	評価
○板書を写すことが苦手で，書く活動になると離席が多くなる児童がいる。 →空間把握ができていない可能性がある。	☆問題等の把握より，書く作業に意識が向いてしまう。	・ノートをコピーしたワークシートを作成する。【教具】	●ワークシートを真似てノートに書くことができた。
		・文字数をノートのマス数と合わせる。文字の大きさを統一する。【板書】	●行替えをする箇所が正しいか不安にならず，確認する回数が減少した。
○注目や集中の持続が難しい。興味があることには集中できる児童がいる。 →様々なものに注意が移りやすい可能性がある。 →自己コントロールが苦手な可能性がある。	☆話し手に目を向けることができない。	・キャラクターのペープサートで注目を促す。【教具】	●一定時間注目することができた。
	☆離席や場にあわない発言等をしてしまう。	・見本となる児童や，良く変化した児童等をモデルとして全体の場で褒める。【指示】	●褒められたい気持ちもあり，他の児童の真似をしながら改善できた。
	☆学級全体が何をしているのかが分からず，次の活動に移ることができない。	・問題クリア毎にシールを貼らせ全体で確認する。【教具】	●シールを貼りたい気持ちもあり，注目できた。
○指示通りに動くことが苦手な児童がいる。 →聴覚情報を認識することが苦手な可能性がある。		・「お約束」を確認し，何をすべきかの把握を促す。【教具】	●「お約束」で示した動物になりきって動けた。
		・全体の指示後，様子を見て個別に声かけをする。【指示】	●全体＋個別の対応後，周囲に目を向けられた。

（2）考察

琉球大学教育学部附属中学校における授業実践では，主に視覚情報を意識的に増やしたことが生徒の学習への参加につながり，効果的であったと考えられる。一方，グループで行う活動の指示内容が伝わりづらかったことや，授業の進行とワークシートの構成が完全に対応していなかったことで生徒を混乱させた場面があったため，今後改善していくべき課題である。また，学級全体がグループ学習の形態に慣れており，他者を批判しない雰囲気が浸透しているという実態を踏まえる必要がある。

宜野湾市立普天間第二小学校における授業実践では，表２で示した工夫・手立てに加え，学級担任からの助言により行った，複数の解法を区別する際に「〇〇作戦」とそれぞれに作戦（解法）の名前をつけて共有することも児童の学習内容理解に効果的であった。一方，発問「他の考えの人はいますか」の「他の考え」の意味が上手く伝わらず，授業が停滞したことがあった。発問をするときに，簡潔かつ児童が意味を把握しやすい言葉の選択等の改善が必要である。学級全体の様子として，学習意欲の高さや好奇心の強さが見られ，自分の考えを表現したり，他者の発表を聞こうとしたりすることができる雰囲気であったことも考慮する点である。また，評価については，琉球大学教育学部附属中学校における実践と同様に，小学校の実践においても児童対象のアンケートを実施する必要がある。

６．今後の研究について

今後は，課題発見実習Ⅰ・Ⅱの成果と課題を踏まえ，実態把握の質の向上を図り，その結果をより授業と関連させながら，個から学級全体への視点での授業づくりをすすめていく。

[文献]

中央教育審議会初等中等教育分科会（2012),「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321669.htm（2018.1.29 現在）

井上賞子・杉本陽子（2008),『特別支援教育はじめのいっぽ！』，学習研究社

伊藤良子（2016),「インクルーシブ教育におけるユニバーサルデザインとは？」『東京学芸大学教職大学院年報』，第４巻，pp. 13-23

片岡美華（2015),「ユニバーサルデザイン教育と特別支援教育の関係性についての一考察」『鹿児島大学教育学部研究紀要　教育科学編』第 66 巻，pp. 21-32

河合隆平（2016),「特別支援学校における教育要求の組織化とその今日的課題」『障害者問題研究』第 44 巻（１），pp. ２-９

東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会 with 小貫悟（2010),『通常学級での特別支援教育のスタンダード：自己チェックとユニバーサルデザイン環境の作り方』東京書籍，pp. 39，312-313

文部科学省（2017),「小学校学習指導要領解説　総則編」http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/07/12/1387017_1_1.pdf，pp. 105（2018.1.29 現在）

文部科学省（2017),「学校基本調査　2017 年度」https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400001&tstat=000001011528（2018.2.1 現在）

大須賀隆子（2016),「通常学級における軽度発達障がい児支援とユニバーサルデザイン教育の試み」『帝京科学大学教職センター紀要』，第１巻(1)，pp. 143-150

田上美由紀・猪狩恵美子（2017),「日本におけるユニバーサルデザイン教育をめぐる研究動向　－インクルーシブ教育の実現を目指した通常学級改革の視点から－」『福岡女学院大学大学院紀要　発達教育学』第３巻，pp. 19-26